

境を区切るもの 家札・門札・免札を例に

立 平 進

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

要 旨

民俗学は、ある特定の地域を限って調査する場合が多く、所定の調査項目に従ってではあるが、主な手段として、いろいろな分野(角度)から聞き取り調査を実施することになる。その際、調査対象地域をどのように設定するのかという基本的な命題がある。

調査対象地としての地域は、ただ単に地理的広がり範囲を対象とするのではなく、民俗学的な領域について、その範囲を確定する必要があるからである。地域を認識することについて、過去に必ずしも十分に研究されてこなかった経緯がある。ほとんどの場合物理的に地理的広がり地域として認識していたためである。

ある地域に住む人々は、どのような広がりの中で生活していたのか、あるいは自らの生活範囲について、どのように認識しているのかということが問題であるのだが、これが民俗学的に明確に示された例は少ない。

本稿では家と屋敷と村境について、比較的容易に境を示すことができる事例が抽出できたため、これを報告しながら境を区切るものは何かという表題に近付いていく手がかりとした。

ここで取り上げたサブタイトルに記す「家札・門札・免札」は、民俗資料として、特に信仰の民具というべきものである。その信仰に触れながら、民具として機能している実態を考察した。

キーワード

民俗、境、信仰、木杭

1 はじめに

民俗学は、ある特定の地域を限って調査する場合が多く、所定の調査項目はあらかじめ用意されているが、主な手段として、いろいろな分野(角度)から聞き取り調査を実施することになる。

また別に、一つの課題を全国的に調査するという場合もあるが、その場合は地域を深く掘り下げたわけにはいなくなる。これは比較とか分布ということを前提としている。

本稿で目的とする要件は前者であり、一つの地域を掘り下げていろいろな分野から調査研究を行う場合である。その際、一つの地域というものをどのように設定するのかという基本的な

命題がある。

調査対象地としての地域は、ただ単に地理的広がり範囲を対象とするのではなく、民俗学的な領域について、その範囲を確定する必要があるからである。

(ただし、調査以前に地域を明確に設定することが難しい場合もあり得る。)

民俗学のフィールドワークでは、過去に調査地域を設定するに際して、地域という広がりを理解する場合、必ずしも十分に検討されてこなかった経緯が認められる。ほとんどの場合物理的に地理的広がり地域として安易に認識していたのである。

ある地域に住む人々は、どのような広がりの中で生活していたのか、あるいは自らの生活の範囲（空間的広がりを含めて）について、どのように認識しているのかということが問題であるのだが、これが民俗学的に明確に示された例は少ない。

本稿では、家と屋敷、村境について、比較的容易に境を示すことができる事例が抽出できたため、これを報告しながら、境を区切るものは何かという表題に近付いていく方法とした。

「境を区切るもの」という場合、本稿では、村境を具体例として取り上げているが、これを手がかりに、人間生活のいろいろな境にまで考えを展開していきたいと考えるものである。

民俗学は、研究の性格上、本来が地域学であり、地域に立脚しない調査研究は考えられないとさえいわれてきた。

どこそこの事例（場所）で、誰の話（話者）というものが無い場合、科学的に証明する根拠とはならないからである。

そのような理由で地域を特定しない事例というのはあり得ないことになるのである。

2 本稿の概要

表題については、直截的であるため、最初に趣旨を説明する必要があると思われる。

(1) テーマについて

本稿で取り上げたサブタイトルに記す「家札・門札・免札」についてであるが、それがどのようなもので今までのように注意されてきたのか、簡単に触れておきたい。

民俗資料として、特に信仰の民具というべきものである。

家の玄関口と屋敷の出入り口と村境に立てられる木の札のことである。この木の札は、椎の木などの生木を使うが、長さ 50cm 前後、直径 5 ~ 6cm の丸太木を杭状にして、片面を平たく削り、そこに祭文を墨書したものである。長さは一定してないが、村境に立てられるもの

は、1m 以上のものもある。墨書する祭文の最初に「安那塞」と記されるところから、安那塞（あなふさぎ）の神と呼んでいるところもある。

本稿では、民間信仰の用具として、信仰に触れながら、民具として機能している実態を考察したものである。

なおこの種のものは、九州西北部にのみ分布するということから広く知られていないこともあり、注意を惹くことは少なかった。

最初に注意されてから、すでに30年が過ぎており、このような論考にするのは遅きに失した感も免れない。



写真1 土谷免の門札 手に持つのは、平成16年の札。今年（平成18年）のものは左手草叢の中に打ち込まれている。（平成18年9月撮影）

(2) 調査報告例

最初の紹介例は、『佐世保市民俗資料調査報告書』（昭和39年）佐世保市教育委員会編であったと思われる^{注1）}。

「七月の村祈祷 村全体の悪病悪疫を退散させるために祈祷し、 略

この村祈祷の後で村の東西南北の村境には経文を書いた木片とそれに色紙を吹流しにして笹竹につけて立て、そこから人畜の悪病の入ってくることを封じた」と報告している。

次に、『日本の民俗・佐賀』（1972）には「境木」として写真入りで掲載されている（北波多村）^{注2）}。

「夏季の病災よけの夏祈祷のあとで村境に祈祷札や境木を立てるところがある」と記す。後の写真8番に紹介したものである。

論考としては、昭和51年に、下川達彌が、農耕祭祀と関連付けて論じている^{注3）}。

「本来は悪病悪疫の侵入を防いで地区の安全を祈るために行われた祭祀である」としながら、「これが次第に農耕社会の中であって、いわゆる塞神の性格を減じて、一部では、「あなふさぎのかみ」として田の水漏れを防止するためのもの、またコケン状の頭部くびれ部をもつものが見られるところから、「穴をふさぐ」すなわち生殖、生産につながる五穀豊穡を祈る農業神としての立場へ移っていったようである」と記す（同85頁）。

災いを取り除くという意味から、そのようなことも考えられるのかもしれない。

立平は、昭和61年に、信仰の木として事例を紹介している^{注4）}。

「門札・辻札」として、本来の悪疫退散の用途を示し、祭文を添えて記した。

ここでは家に置かれるものを門札としたが、それには二種類あり、玄関と屋敷の門の傍に置かれるものを指している。後に記すが、神社と寺院の別もある。

辻札としたのは免札と同じもので、道路脇の村境に立てられることから、一般名称として用いたものである。

なお、これが木の杭状のものであったことに強い関心が寄せられたものである。今後、紙の印刷物となってしまうのは、信仰の民具としての立場から特別の意味を持つものではないかと思われる。

このような経過を示したが、その後、民俗学的に論じられることもなく今日に至っている。



図1 福島町土谷免、位置図 八地区の集落がある。塩浜免、浅谷免、土谷免、原免、鍋串免、里免、端免、喜内瀬免

3 調査

(1) 経過

本稿で検討する事例は、長崎県北松浦郡福島町土谷免でのことである^{注5）}。

調査は、昭和51年（1976）に行ったものである。報告は『福島町土谷の民俗』（昭和52年刊 長崎県教育委員会編）を刊行している。

報告は、13項目（分野）を4人の調査員が分担して調査執筆したものである。その成果については、共同の所産とするものである。

境界について、調査報告をした当時は、それほど意識するものではなかったので所定の調査項目に従って報告している。

その後、「道切り」など民俗事象と比較検討した結果、この事例が民俗学的にかなり重要であると考えられることから課題とした。

今回は、本稿の目的に副って再調査を行い、関係図を描くことができたこともあり、論考としたものである（平成18年9月再調査）。

以下は、報告書を引用しながら基本的な事項を確認して説明した。

(2) 調査地概要

調査地は、長崎県北部にある旧長崎県北松浦郡福島町土谷免（どやめん）である。

福島は長崎県の北部に位置し、伊万里湾口の東方にあたる。一島一町の町である。佐賀県境の伊万里市ともっとも近いところでは海をへだてて200メートルである。

島の形は、ほぼ正三角形で、南北7.3キロメートル、東西5.9キロメートルである。島中央部の上場は、標高約150メートルの台地になっている。

調査対象地の土谷免は、中央台地の西側斜面に標高50～90メートルの比較的高い場所へ集落が広がる。

その西側斜面の中腹に約50戸の集落が道を挟んで上下に点在する。集落より下位に海岸へ至るまで水田が段々に棚田で展開する。集落より上位には畑地と山林が台地の上まで続く。

福島は、中世からの歴史があり、福島氏を名乗る松浦党の一員であったことが記されている（松浦家世伝）。江戸時代には平戸領になっている。

大正7年『福島村郷土誌』には、江戸時代として、戸数500戸、その内、土谷免50戸とある。明治時代になると、戸数535戸、人口2,675人と記されている（明治22年）。

特筆されるのが、明治27年頃から石炭採掘が始まったことである。これは昭和44年に閉山している。

福島町内は、集落が、次の8地区（免）に分かれている。長崎県の北部では伝統的に集落の

単位を免で表記している。大字にあたる範囲と思われる。

塩浜免、浅谷免、土谷免、原免、鍋串免、里免、端免、喜内瀬免



写真2 土谷の棚田 日本の棚田百選に認定されている。

(3) 土谷の社会生活

報告書には、次のように記している。

「社会生活」の項目である（立平進報告）。

「1 村境と免区分

福島町土谷免は、向かって右隣りの浅谷免と左隣りの原免にはさまれた純農村である。浅谷免と境にコクダシというところがあって、ここではタヌキが出てよく人をばかすと言われていた。夕方には、ここを越えて浅谷へ行く人はなかったといわれるところから、事実上ここが村境と思われる。村境を示す明確な碑などは全くなかった。原免との境もはっきりしていない。原免へ下る道筋に五輪様（五輪の塔の事）があり、ここらあたりが原免との境ではないかと推定される。行政上の土谷免の区分は総観に示すとおりである。

また、田圃や畑地に関しては免外にまで土地を持つ人もいたが、免外の人が土谷免にまで入り込んで土地を持つことはなかった。

さらに、ここは集落の出入口でその内外が

はっきりと区別されていた。免札と呼ばれる道切が東西南北の集落への出入口に立てられるところから、そこが内境と見られる。実際には塞の神の意味をなすものと思われるものであった。

ところで、土谷免は四つの組に分かたれていた。現在の県道を上下にはさんで、上側左から清水組、中を土谷組、右側を大平組といい、県道より下側を白米組としている。それぞれ12軒から15軒の単位である。しかし、免内の組軒数はいつも一定したものではなく戸数の増減にもなって組境にあたる家では組数の均衡をみながら右に入ったり左に入ったりした。」

(同報告書、162頁)

調査を実施した当時は意識して境を区分したものではなかったが、調査の項目に従ったものであったが、境を区切る目安として、これが具休例となるものである。

(4) 土谷の信仰

報告書には、次のように記している。

「信仰」の項目である(末富康二報告)。

「8 マブリカキ

正月から2月の間にマブリカキをする。マブリカキとは安那塞(アナフサギ)の神の守札を書いて、屋敷のキドなどに立てるのである。

お稲荷さまの日などに組で分かれて今山神社の神主さんにかいてもらう。この日新しく神棚も飾る。半日もかかって書く。神主さんには2~3千円のお礼をする。あとで当番のうちに組の飲み食いがある。マブリ札の文字は、

櫛磐真神

安那塞神三柱大神 家門長久諸災転除一切
成就息災常磐堅磐守護幸給祈禱

豊磐真神

と書いてある。」

(同報告書、172頁)

マブリカキは、お守り書きのことで、神職に種々のお札を書いていただくものである。安那

塞の神とは、安那とは神の頭に付ける尊敬の意味を持つ接頭語であり、塞ぐとは災いをさへぎる神という意味である。

「9 お札

門口に貼った札は、

- (1)子安講 伊予香園寺
- (2)金比羅本宮崇敬講社
- (3)奉修護摩供 家内安全祈 吉原山 院
- (4)安那塞神三柱大神(略)
- (5)立春大吉
- (6)大般若祈祷宝牘 東海山福寿禅寺
- (7)鎮防火觸
- (8)速須佐之男 家内安全罪穢諸災消除守護
蘇民将来之子孫也

など貼ってあった。」

(同報告書、172頁)

八枚のお札が玄関の入り口の上に貼られたり納められているのである。長崎県でもこの数は多い方である。

「10 ムラギトウ

正月9日、福寿寺から免まわりがあり、お札を書いてもらう。大般若経サマともいう。

「奉転読大般若経全文専祈家門繁栄諸災消除諸縁吉祥収 土谷免中」と書いた木の札を、組によってそれぞれちがっているが、白米組はこれを「とうのき」に行く道に立てる。

福寿寺には土谷免の免費から1万円を包む。なお、葬式には5~10万円包むと院号がもらえる。また、ころも料あるいは心づけには5~1万円包むという。」

(同報告書、173頁)

ここで神社の祭祀になるものと寺院の仏事になるものとの別があることも分かる。

神社からいただくものをマブリフダといい、寺からいただくものをハンニヤサマといった。行事名でも、前者をマブリガキといい、後者をハンニヤサマという。

筆者が後にこれを家札・門札・免札というの

は、隣接する地域の例を含めて一般名称としたものである。

寺からは家札と免札を村祈祷の時に、神社からは門札を講經の時に書いてもらおうとするものである。



写真3 土谷の家札



写真4 土谷の家札納箱

4 展 開

ここでは、家と屋敷、さらに村境について、報告書に記された記述を基に、今回、改めて再調査したものを加えて考察した（平成18年）。

(1) 場所を区切るものの名称

お札が安置される場所は決まっており、その場所により、家札、門札、免（辻）札と呼べるものであることを確かめた。

・家 札（いえふだ）

報告書の説明のとおりである。

正月9日に福寿寺からきて、お札を書いてもらった。これを家の玄関に祀り、種々の厄害から家を守るものである。これが家札である。

昔は、家の玄関の上に祀られるものは白木の板に書かれていたが、現在では和紙に印刷されたものになっている。

・門 札（かどふだ）

マブリガキの時に書いてもらう。生木の一部を削り木質に祭文を墨書するものである。木の杭のような状態で、先を尖らせてあり、必ず門の脇に打ち込まれる。

これは屋敷を含めて、家の門から災いが入ってくると思われていることから家を守るものである。

門札はマブリフダ（守り札）と呼ばれているが、その機能から、門札と呼ばれるべきものである。これらは祀られる場所が明確に区分されていることによる。これによって祭祀の範囲が決められていることになる。

祭文が次のように墨書されている。

「安那塞神三柱大神 家門長久諸災転除一切
成就息災常磐堅磐守護幸給祈祷」

（写真1、参照）

・免札（めんふだ） 辻札（つじふだ）

地元では、行事名と共に、これをダイハンニヤサマ（大般若様）とかハンニヤサマという。

正月9日に福寿寺から免まわりがあり、お札を書いてもらっている。祭文が次のように墨書されている。

「奉転読大般若経全文専祈家門繁栄諸災消除
諸縁吉祥収 土谷免中」

このように、免札を立てる場所が境となるのか、境であった場所に立てたのである。境までの広がりや村々によって異なる場合もあるが、何れも境地であることに代わりはない。



写真5 土谷の免札、字清水

土谷免の場合、昭和51年の報告書の社会生活の項目では、土谷免と両隣の村との境について、右隣の浅谷免とは「コクダシ」で、左隣の境が「五輪様」と記した。

コクダシは浅谷免に入るが、「小下し溜池」という場所があり、狸が出て人を化かすと言われたところである。免札は、現在もう少し土谷免寄りの「イワエン」と呼ばれるところに祀られている。イワエンの意味は分からない。

原免との境は五輪様と記しているが、そこは字清水と呼ばれる場所である。そこに今日まで免札が祀られている。そこは五輪の塔が田圃の土手に石積みとなっていたこともあり五輪様といていたが、今日では、別の場所に五輪塔の

石塔群があり、これが旧町の指定文化財となっていた。

これらが村境を区切る指標となるものであったはずである。年行事の「虫送り」の時は、ここまで追い出し送り、ここから隣村へ渡すと証言したことも境を示す一つの証拠といえる。しかし今日では虫送りの行事の記憶も消えてしまっている。



写真6 土谷の免札、イワエン 何年もこの場で神事が行なわれてきたことを示すかのように古い札が立ち朽ちている。他の場所では、草に覆い隠されているところもあった。

(2) 周辺地域の状態（分布）

このような木杭に祭文を書いた信仰は、長崎県の北部地域一帯で行われている。長崎県佐賀県^{あかみち}の他の地域でも、免札あるいは辻札（境木）は、必ず村境に立てられている。その例を幾つか掲げておきたい。

・長崎県松浦市

市内志佐町高野免と里免^{あかみち}の境地で赤道と交差する場所に祭祀されていた。写真7であるが、平成18年夏と墨書されている。長さ 73cm、直径 3.8cm の椎の木の杭で、ここは淀姫神社の神主さんが来て祀るといっていた。



写真7 松浦市志佐町高野免

・佐賀県伊万里市

市内黒川町福田と同波多津町煤屋の境地で、国道204号線沿いにある青嶺中学校下の歩道の脇に祭祀されていた。写真8である。

ここでは、田島神社の神職が来てお祓いをしているという。筆者が知っている30年前の札は、この場所とは道の反対側で、今より長く太いものが立っていた。長さ150cmほどの杭であった。ここでは境木という（『日本の民俗・佐賀県』参照）。



写真8 伊万里市波多津町煤屋

・長崎県佐世保市三川内町

通称三川内山と呼ばれている場所で、焼き物の里であるところから皿山とも呼ばれている。集落の入り口の田圃の脇に辻札が立っている。「安那塞座三柱村中安全祈収」と祭文が記されている。地区の家々でも行われており、門札が見られる。

・長崎県佐世保市吉井町

旧北松浦郡吉井町橋川内免で行われている。正月7日までの間に神職に来てもらい「マブリカギ」を行った。これをコウギョウ（講経）という。マブリ札は必ず免境に立てられた。

・長崎県平戸市田平町

旧北松浦郡田平町大久保免で行われている。「安那塞三柱大神守幸給」と祭文が墨書されている。

・長崎県佐世保市世知原町

旧北松浦郡世知原町である。この地の山神社の神職がコウギョウ（講経）を行っている。

ここで取り上げた数ヶ所の他にも、まだ各地で行なわれているが正確な分布図は作成されていない。また、神社によるものと寺によるものとがあり、祭文が異なる。

5 結 び

(1) 境について（考察）

かって筆者は、境界について記したことがあった^{注6)}。

その中で、「異境を区切る、境の意識」と題して論じたことがある。本稿はそれを基に地域研究として再考したものであり、具体例として民俗にみる村境や家境を扱ったものである。

境の内側には、村の人々が所有する田圃があり、さらにその中の一回り小さな区画に集落が一塊りになって営まれているのである。

土谷では、この集落の出入口でも、その境ははっきりと区別されていた。そこには「免札」と呼ばれる外から来る災いを取り除く道切りが立てられていたのである。

この免札は、隣接する地域で「境木」とも呼ばれ、悪霊を遮る塞の神としての役割を担っているものである。それが木の札で、椎の木など常緑樹の一面を削って祭文を墨書しているのである。

さらに戸別の家に至ると、屋敷の出入り口には、門を設けた家は少ないが、門にあたる場所に同じような門札が立てられているのである。これも家に来る災いを取り除くためのものである。

そして家は家で、玄関には家札があり、外とは区切ることができるわけである。

このようにして見ると二重三重に境があり、家に至るまでには、観念上の境から、具体的な境に至る経緯が見えてくることになる。

家の中でも、土間と床は具体的に区別されているし、人がいちばん集まり普段の生活をする居間と神や祖先が訪れる座敷は、はっきり使用上の区別がある。

これらのことは、すべてが生活の中で、境を意識したものであるといえる。次の図2に示すものはその模式図である。

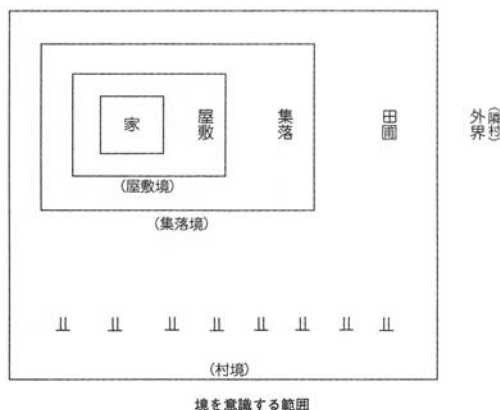


図2 境を意識する範囲の模式図 模式図は、形になっているが、村が 形であるというのではない。範囲を示すもので、形は概念的である。

(2) 民俗学における境について

地域を区切るものの研究として、同じ設定を

した研究はない。しかし関係する論考は多く、先行研究との関係を簡単に触れておきたい。

例えば、沖縄のヒンプンは屋敷の出入り口の正門にどっかりと防波堤のように居座る施設である。屋敷と外を分けて、家に災いをもたらすものを排除して家を守ってくれる施設である。これは立派な境である。

そのような顕著な例ではなくても、全国的に「道切り」と呼ばれるものは、至る所に見られる。大蛇の姿をしたものとか、大きな藁人形だとかは、その村に入ってくる災いを防ぐためのもので、みな境に置かれている。

『日本民俗大辞典 下』によると、次のような記述が見られる^{注7)}。

「勧請縄や関ノ札は村境の標示となって、村の領域を限りこれを守る機能を果たす。道きりの民俗は、病因や災因についての民間の知識ばかりでなく、村落領域や村人の世界観を知る上でも重要な手がかりを与えてくれる。」

本稿は、民俗領域にかかわる西北九州の地域研究を補強したものといえる。

(3) 場所を区切るものの意味

境については、物理的な境として、どこかで地域を区切ることになるが、大部分は地理的な境のことを指す。

しかし、地理的な区分に加えて、民俗学的境では、境には境の神様がいるなどと、精神的なことが多く存在する。そして、そのことはどちらも重要なことであるといえる。

本稿の境を区切る信仰の木は、どちらかと言えば精神的な比重が多く見られるもので民俗的な立場からの結果である。

(民俗地域論への発展)

ここで示した範囲は、境を明確にした、地域としての最小単位である。これが民俗的な広さの基礎をなすものといえる。

本稿の一つの目的として、結果的には、民俗地域論として批判をしていただきながら、活用されれば幸いであると思っている。

以下に示すものは、やや空想めいたものにもなるが、今後そのような検証もおこないたいとするものである。

地域を区切るものの中で、平面的な境と垂直的な境界というものがあると思われるのである。垂直的な領域については、どこまでが、人の領域なのか。人が住む空間として認識するものなのか。このようなことも考えてみたいと思っている。

また、地域をつくる人々は誰か、という設定も可能である。言い換えれば、地域を必要とする者は誰か、ということにもなる。農業者とか漁業者とか、それぞれの生活領域は異なるものである。その結果は、当然民俗的な領域も異なってくるはずである。

最終的には、このような地域をつくるのが文化であり、地域の文化遺産ともなるものであるといえる。

謝 辞

本稿を記すにあたって、次の機関と方々にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

長崎県教育委員会、松浦市教育委員会・中田敦之、土谷徳寿（調査協力者）、立平 誠（調査協力者）ほか（敬称略）。

なお、英文抄訳は山田聖剛氏にお世話になりました。

注

- 1) 『佐世保市民俗資料調査報告書』（昭和39年）佐

世保市教育委員会編。

- 2) 市場直次郎：日本の民俗・佐賀，十一年中行事 4 夏の行事，p217，1972。
- 3) 下川達彌：安那塞神の祭祀，えとのす，第6号，pp83-85，1976。
- 4) 立平 進：第二部 木の民俗 二信仰の木 ③門 札辻札，九州沖縄地方の水と木の民俗，pp77-80，1986。
- 5) 立平 進ほか：福島町土谷の民俗，長崎県教育委員会，pp133～222，1977。
- 6) 立平 進：神々と人のふれあい，ろうきん ブックレット3，pp17～21，1996。
- 7) 八木康幸：みちきり（道切り），日本民俗大辞典 下，pp610-611，2000。



図3 松浦市福島町位置図